

ハイデガー存在論における「公共性〈批判〉」の広表

壽 卓三

『存在と時間』によれば、「ひと」があらゆる判断や決断の基準である「公共性 Öffentlichkeit」を予め決定してくれているおかげで、われわれは誰一人として公的事象に対して当事者として責任を問われることなく安穩に日常生活を送ることができる。このような公共性理解は、その後も堅持され、『ヒューマニズム書簡』では、公共性が掲げる世界市民的精神やヒューマニズムに対して、ギリシャ精神に依拠するヘルダーリンの歴史的思索が高く評価される。公共性に対する否定的姿勢は、ハイデガーのテクノロジー論とも相まって、ハイデガー存在論の反民主主義的傾向を示すものとして批判される。存在の「思索」を「行為」と捉える限り、ハイデガーの本来的自己は、大衆的なもの、日常的なもの、さらには本来の形態の共同性に背を向け、ひたすら存在への感謝を表す思索へと向かうのではないかと。当発表では、このハイデガー批判を内在的に検討しつつ、不安感、閉塞感が広がる中、グローバリズム、ナショナリズムという装いのもと、均質化・同質化を強めつつある状況下にあつて、ハイデガー存在論が持ちうる別様の可能性を探っていきたい。

『存在と時間』以後、主体主義や「ヒューマニズム」の残滓と格闘していく過程で、ハイデガーは、「開示性 Offenheit」という形での「存在」との関係の回復に腐心する。1930年以後、非本来性の問題は、平均的日常性における頹落の問題ではなく、恒常的現前性に依拠する伝統的形而上学の問題へと大きく変容する。その際、本来的自己に関するハイデガーの思索にも重要な変容が生ずることになる。『存在と時間』における本来的自己が、ひとの「空談 Gerede」と対抗するのに対し、思索者としての本来的自己が対抗するのは、意志の支配、その極点としてのテクノロジーの支配が人間の生にもたらす破壊的性格に対してであり、そこから脱出して、存在の声に耳を傾ける前提として放下が説かれる。思索を行為と捉えるハイデガー存在論は、確かに公共的世界を軽視し単独化の内に自閉する危険性を内包する。しかし、行為を思索という視点から再構成するのは、工作人の製作に定位する伝統的な形而上学によって行為が抑圧されてきたという認識にハイデガーが立脚しているからなのである。『形而上学入門』では、抑圧された行為の新たな創出、別言すれば、「故郷ならざる在り方 Unheimischsein」を乗り越えて、「故郷を得て安らぐに至る Heimischwerden」帰郷の行程を切り開くという重要な役割が詩人、思索者、政治家に付託される。

彼らは、既成の意味空間を批判し解体する「暴力的な者」、「ポリスなき者」である。というのも、創設者である彼らは、「定めも限界もなく、構造も秩序もない者」として、ポリスの既成の秩序から相対的に自由な存在だからである。プラクシスが「一種の根源的ポイエーシス」と捉えられ、「政治的なもの」が特定の創設者による作品とみなされるとき、政治的領域での闘争は、平等な参加者による討議の関与する問題ではなく、「存在論的次元」の問題、つまり、世界と大地との間の闘争という次元の問題として再構成されることになる。そして、この闘争を調停できるのは、存在への開示性を切り開く詩的な言葉だとされる。日常性に深

く刻み込まれているがゆえに、我々の視野から隠蔽されている暴力性を「総駆り立て体制 Ge-stell」として暴き出し、死すべき者としての人間の住まう新たな空間を開拓する試みが、ポリスなき者の創設に委ねられるわけである。このポリスなき者は、異質なものを排除するのではなく、異質な自他の出会う〈公共的〉空間を創設しうるのだろうか。自己を外部に向かって開き、〈無関係な外部〉を自己の再発見・再生を可能にする〈有意味な外部〉へと変容させる可能性を提示しうるのだろうか。原存在 Seyn と現-存在 Da-sein との「対抗振動 Gegenschwung」、人間の「内向的な対向性 die inwendige Gegenwendigkeit」というハイデガーの思索は、この問いに対して新たな視野を切り開く。存在を忘却し、故郷ならざる在り方において存在する様態は、デイノンの本質である「対抗的なもの」に覚醒するか否かによって、本来性と非本来性とに二分される。故郷ならざる在り方をしながらも、「対抗的なもの」に開かれたアンティゴネーは、故郷なき者にとどまることなく、「存在への連関」が、「人間の本来的な故郷ならざる在り方」だとする知を体現し、「四者連関 das Geviert」の内に住まう。ハイデガーの存在の思索は、異質なものへの開け、異質なものへの応答が、死すべき者にとって決定的な意味を持つことを示しているのである。